

十勝の姿と進路

2007 年は、団塊世代の退職や大学全入時代の到来など、日本の経済の1つの節目となりそうな年である。新しい局面に入ろうとする中で、十勝が進むべき方向を提言したい。

その前に、十勝の現状をみてみよう。人口は、1985 年(昭和 60 年)の 36 万人をピークに緩やかに減少、05 年では 35 万 4,000 人と 2000 年比 1%、3,711 人減った。道全体では石狩を除きすべての支庁で人口が減少しているが、十勝はその中で減少率が最も低く、また全道シェアも 75 年以降 6.3 - 6.4%で安定している。

市町村別では、05 年の国勢調査で、これまで増加を続けてきた帯広市が初めて減少(マイナス 1.4%)に転じた。自衛隊縮小の影響が大きいとみられるが、帯広への通勤・通学者が 10%を超える市町村を含めた都市圏(帯広市、音更町、芽室町、幕別町、中札内村)全体では 0.8%の増加で、広域で見れば人口は減っていない。一方、帯広都市圏の外側の市町村では、人口減が加速している(図1)。

次に十勝の経済構造を、どの産業でどれだけの付加価値を稼いでいるか、という観点からみてみよう。データの制約から 98 年時点と少々古いが、十勝は道内総生産の約 7%を占めている。先に示した人口シェアよりも高く、道内平均よりも生産性が高いことを表している。

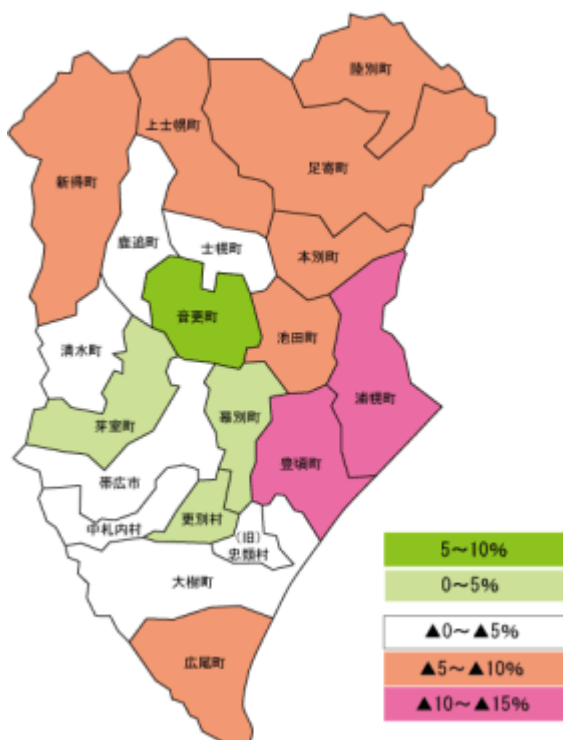
産業構造では、農林水産業と食料品製造業で全体の 2 割弱を占める。この比率は道全体でも大きく、まさに十勝は食関連産業の一大拠点といえる。また建設業が 12.7%と高く、道全体を上回る。一方で、食料品以外の製造業や金融業などでは下回っている。

また、十勝を1つの国と見立てて貿易状況を見てみる。道外、道内他地域への輸移出は約 7,000 億円、輸移入は 9,400 億円で、差し引き 2,400 億円の赤字。相手先別にみると、お隣の釧路・根室圏に対しては黒字だが、その他の道内他地域と道外に対しては赤字だ。業種別では、水産以外の食料品や農林業が「外貨」を稼いでいる一方、金融や電力、石油、商業、対事業所サービスは外部に依存している(図2)。

十勝の中ですべて自足自給することはしよせん無理であり、赤字業種があることを気にする必要はない。強みを伸ばせば良い。今後、人口減少が避けられないとすれば、地域戦略として付加価値を高め生産性をさらに上げていくしかない。付加価値は、消費者に近い部分を扱うほど高まる。より最終製品に近い形で十勝から出荷し、そして高く買ってくれるところに売る。良いものを安く作るだけでなく、高く売る術(すべ)を磨いていくことが、十勝の進路を決定付ける。その機能を、中核都市の帯広が担えるかが大きなカギではないか。

< 図1 >

2000-2005 人口増減率



< 図2 >

十勝の域際収支(単位:百万円)

黒字上位10業種

その他の食料品	62,591
食用耕種農業	34,536
と畜・肉・酪農品	34,190
精穀・製粉	14,722
林業	11,104
非金属鉱物	9,156
教育・研究	3,319
その他の対個人サービス	1,538
飲食店	1,332
基礎化学製品	740

赤字上位10業種

金融・保険	▲ 82,992
電力	▲ 46,308
石油製品	▲ 43,260
金属製品	▲ 36,530
商業	▲ 36,474
対事業所サービス	▲ 32,895
運輸	▲ 28,506
水産食料品	▲ 26,138
その他の製造品	▲ 22,020
畜産	▲ 21,572

(資料)「平成10年北海道内地域間産業連関表」(国土交通省北海道開発局)